

三河アララギ

平成二十六年

三月号

第六十一卷 第三号



ニューヨーク日記(89) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 4, 2013 : Central Park in the fall

Blue Shoe Diaries



秋は景色が奇麗だよ。セントラルパークの色がどんどん変わるのを見るのが面白い! 散歩中の人結構皆カメラを持って歩いてる。私はその中でもリテラリーウォーク(シェークスピアの銅像が有る所)を季節が変わる時行くのが好きなのよ〜

I love the fall! How the leaves turn colors. One of my favorite places is the Literary Walk in Central Park. I try to come catch the foliage and I always miss it!!! This year, I kinda made it. Lots of people here with the same idea. Camera in hand in an attempt to capture the beauty.

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

眼に見えず耳にきこえず庭石のぬれたるいろに寒の日の雨

P
86

土より咲く春の花の芽群がれる青きところにて我が立ち帰る

P
91

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

秋雨に波紋小さき池の水金魚たちまち餌を吸ひて去る

スモン病は手にも来たるかをりをりに萎えを感じる昨日も今日も

石畳に吾が影小さくうつりつつ玉黄楊光る庭帰るなり

水面みなも

蒲郡 岡本八千代

夫の個展きのふにすぎて朝茜あかく広がる東の窓に

かたづけれるものもそのまま呆然としばし朝あしたの茜いろの中

青年の孫らと語らひその中に無口となりたるひとりのありつつ

われなりに夫の油彩の一つづつに静かなる感動湧きくるごとく

黙々と佇ずみてひとり夫の絵のカルトン画小さき額々の中

いつしかに暖房の音気づかずに「ノボさん」読みてをり子規浮かべつつ

事ことすぎて一日一日がまたすぎる今朝も新しき水色の水

ほとばしり出でくる水のこの水色流れつつさへ水面みなもの光り

水流れ小さき器うつはに溜りたり小さきは小さきに水面はひかる

溜りたる水面みなものひかり流れゆく水面感じつつわれのはじまり

万両

東京 今泉由利

この赫をいついつまでも残さむよ万両描く一粒一粒

万両のたわわに稔る粒々の一粒一粒太陽光る

掌の檜柱目の角材の内にもまします仏様探す

新しき檜の香りを重ねゆく一刀一刀一刀

白金も黄金にも増す角材の内にもまします仏様探す

仏頭のおほひなる耳彫るときは声かけながら心の声を

幾重にも檜の香り重なれり香りの中に香りをつくる

遠く近く富士山はあり安堵する浮世絵めぐる現実めぐる

富士見坂通りゆくとき富士山を探していたり探し得ぬまま

富士山に近づきゆけり真向へり目に見ゆる富士手に描く富士

初日
豊川 弓谷 久子

跨線橋の彼方の空をくれなゐに染めて初日の今のぼり来る

心静かにくらしゆきたしそれだけを願ひて今年の初日を拝む

金色夜叉の熱海の海岸思ひをり夜空にぼっかりまんまる月に

雀等に交りて今年も首白き野鳥一羽がパンを啄む

何処まで旅して来しか我が庭を忘れず野鳥は帰り来りぬ

昨夜読みし時代小説の感想等話しつつ朝の熱きコーヒー

懸案のひとつ漸く目途つきぬゆとり出来たり我の心に

大寒のひと日はつこり今朝ぬくし日向の縁に猫とくつろぐ

華やかにとき色となりぬ梔子の実にて染めたる白絹の布

育ち悪しと言ひつつ呉れゆく蒔蓀草人みなやさし一月の尽

遠 泳

新城 青木 玉枝

駅伝の正月行事九十年生きて楽しむテレビに二日^{ふつか}

足腰も不自由になり初詣何処へもゆけず亡夫に灯りを

故郷へ初詣にもゆけずして竹島橋^は渡る人なつかしみ思ひをり

御社^{みやしろ}を詣でし後は竜神岬三河の海を出でゆく船を

遠泳で大島めぐし達成すわかき日のわが水着姿を

赤鬼と青鬼おかめデーの午后節分を前に楽しみて折紙

熱き湯のデイの湯舟につかりつつ今日のひと日を安らぎてをり

起き出でて朝のしじまの庭に出で山里の空気胸一ぱいに

今日も又元気にひと日暮さむと朝陽に祈りの両手合せて

裸木に若芽の見ゆる季を待つ日向ボッコのベンチに坐りて

小さな靴

豊川 内藤 志げ

二十人一間に寄りて元日のうからの宴昼のひととき

玄関の靴靴くつの蔭になり赤き小さき小さな靴が

生垣の中より抜き出で茱萸の木は隣の畑に棘とげの枝

破れたる穴に合せて不揃に花形作り障子張りたり

縦長に花卉作りて繕ひし障子に西の陽明るく照らす

玄関を出でたる向ひに四日の月正月四日冴えざえの月

行き止りの札立つ所に茎太き水仙の花今年の初花

枯れ草の匂ひとなりたる向日葵に陽の当る日は微か黄の色

軒下に黄に揃ひ咲きし向日葵は一夜の凍てにさむざむと果つ

枯れ草の匂ひとなりたる向日葵を桶に二株移してをきぬ

鎮魂の海

東京 佐藤喜仙

錦繡の野山は神の絵筆にて描かれしものか人智およばず

街中の公園の隅ひそやかに花返り咲くも気づく人無し

手術後に窓より外をのぞき見る銀杏黄葉の我を圧倒

四月から高校生だ島はなれフェリーボートの行く先に夢

露天湯に皺を寄せたる空つ風上州の湯はああいい湯だな

手袋をしたまま押せる携帯のボタンは小さくまちがひばかり

銭湯の幟バタバタ木枯に吹かれて客は帰宅をいそぐ

北風が強き銀座の裏通りおでん屋の隅でわびし酒酌む

麗かな秋のひるさがり断崖にイーゼル立てて空と海描く

鎮魂の海は静かに光りをり母と子供の祈りの長さ

誕生日

岡崎 林 伊 佐 子

健やかに共に添ひきし老いふたり長き縁の天寿を祝ふ

花束を嫁にもらひし誕生日老いたるわれの幸せ思ふ

柚子の木に柚子の玉照る里の庭食ひにくる鳥の声は聞えず

裏山の杉森の中に淡雪が風に卷かれてふりては消ゆる

音たてて踏むに崩るる霜柱この山道をハンターの行く

冬山に斜光あまねく照らしめて静寂として木々の並み立つ

羚羊も猪も住み縦断するこの山道は昔の旧道

雑木の枝はかたみに打ち合ひてわが持ち山の山風寒き

キャベツ葉の巻き葉に潜む青虫が新年の朝凍死してをり

食べ余す大根は畑に埋めて置く昔の智恵を学びし管理

日課

豊川 安藤 和代

重ねある絵馬に早春の陽は射して財賀寺の庭の鎮けさにをり
生命線自慢の友が早や逝きて冬のひと日を長しと思う
吾編みしマフラー手袋しつかりと夫との散歩も日課となれり
寒空に剪定する人の軽やかな音を聞きつつ梨畑を過ぐ
吾が歌を淋しい歌と言う友よ少し待ちくれ雪とけるまで
帰宅する孫の好物カレーをば朝からルンルン煮込みてをりぬ
高校は母の母校を志望すと夜半も孫の部屋の灯消えず
ストーブの上の切餅ふくらめば顔かお顔が並び待ちをり
落ち椿拾ふ園児の声響きけふ砥鹿宮の森は明るき
シカゴから留学の孫の雪便り心ほかほか胸深く抱く

若水

豊橋 胃 甲 節 子

元旦の花の水替ふ井戸水にあらねど清し若水汲みて

今年未だ梅もロウバイも固き蓄風強き庭に出でて確かむ

君子らん金のなる木とセントポーリア眩暈に倒れし吾が背のクッション
種植ゑて忘るる程の歳月を経て清らかな白椿の初花

成人の日の満月を仰ぎ見る視力劣りて満月のまわりぼやけぬ

お隣の奥様のお土産の絵ハガキは季節の花を描きたるもの

寒中見舞に長距離電話を下されし清美さんは九十歳を過ぐると

高く低く往き還る飛行機数知れず何処にも行けずため息の出づ

何気なく見る裏庭に吹きすさぶ風にも敗けず紫陽花の芽吹き

シクラメンの鉢もそれぞれ三年も咲き次ぎてゐる吾の喜び

三が日

沼津 鈴木孝雄

はせをとほ誰のことかと孫が訊く江戸の仮名など外国語かな

三が日孫と連珠を楽しめり手抜き無しでも三勝三敗

駅前のお燦々通りにまたシャッター元の店名思い出せずに

ブルトーザー住宅地の田に入りてカエルに構わず土掘り起こす

ピチピチと水面跳ねる鰯の群れ冷たい海に光が動く

陽に誘われ島郷海岸散歩する赤石岳を正面に見て

ニラの葉は年末までは持ったのに茎が萎れる今日の寒さ

新春の光を受けてエンドウがじわりじわりと芽上に伸ばす

誕生日いつものようにテレビ体操伸ばす腕にも力を込めて

船原館で林芙美子の小説話天城に埋もれた逸話の発掘

大樟

東京 小柳千美子

野火見えて煙乗り来る路線バス終点まではあと一時間

チチチチと梢ふるわせ寒雀父母在す里に朝日差しくる

真夜中に起きゐる母に寄り添ひて燠わかをかき立てしばし語らふ

何事と頬骨出づをいぶかりて鏡覗きつ父退院す

妹の母想ふ心嬉しくも過敏となりて黙し聞き入る

火山灰降ると洗濯物を取り込めば慌てぶり見て母は笑へり

標には跡と記されし薬師堂訪へばはだかる枯葎

今もなほ里にそよげる大樟の根方巡れば数多ひこばゆ

昔より里に立ちける大樟の幹を抱けば時ぞ止まるや

刻刻とバスの時間の迫り来て切なき思ひ笑顔に隠す

ラストラン

東京 森岡陽子

始めてのカラオケ店に踏み入りぬ友の歌聞き目はキョロキョロと
夕日背にオルフェーヴルのラストラン赤茶が映える声援の中
断捨離と日記をやめた新年度せめてメモだけ何か寂しく
年神を迎えて喜ぶおじ達はお酒お酒とゴロゴロ寝
公園で聞える鳥の鳴き声に枝葉のすき間姿をさがす
芹なづな七草粥のやさしさは喰い正月の胃はもの足りず
氏神に親子で祈る健康を同じ動作でさい銭箱へ
長い時共に過した愛犬が突然逝った秋の日偲ぶ
隣りから賑やかな声冬休みパパと息子と二匹の犬と
小寒の御寺の池に氷張り金色の鯉の姿が見えぬ

不安

大阪 伊藤忠男

明くる年過ぎし月日を数えても戻ることなきあの悔しころ

新しき暦のどこに丸付ける今年の楽しみ探す初春

友笑顔笑顔に福呼ぶか笑い耐えないこの年の年

大寒といえども今は真冬なり特別寒きこともなきなり

何となく心重きや世の流れ憂いは何かと我が胸に問う

そこはかと覆いかぶさる黒い霧払う力がありやなしやと

公的でなくて私的と言うたとて問うは人の人となりなり

まだ晴れぬ心抱える我なのは何をどうしてどうなるのやら

満天の星空近く迫り来る今日も晴れの日さわやかな朝

駆け登る今年午年我の年夢追う姿空に描かん

赤き南天

春日井 清澤 範子

大寒なり夫と廊下の戸を開けて椿の蕾眺めゐるかな

曇りてをれど寒中朝日差し込みて赤き南天静かにゆるる

ヘルニアに今頃慣れて足取が軽くなりゆく吾が娘かな

寒の内なれば五時には陽は入りぬ娘は雨戸を静かに閉る

柿すだれの映像見たり秋越して店頭に並ぶ市田柿かな

新聞の台所情報読みてゐるやや安くなる野菜を買わむ

喘息のシロップ薬をもらひたり吾に良く合ふ薬と医師は

腰をかがめばぐつと痛みが走り来て菜園の草取りままならずをり

定形にして吾が作る味噌汁は豆腐とわかめの赤だしの汁

わが心静めむとして八王子神社に拝礼長く長く祈る

初釜

東京 足立晴代

臘梅の小枝に香るほのかなる春の訪れ早々と知る

富士見台遠く望みしふじの山今見る姿はごまビルの間に

大寒の凍いてつく星の輝きも震ふるえる如く見ゆるなりけり

冬空に目映まゆきネオンの塔とう高く赤青黄あかあおきいの美うつくしきかな

若き日に白き息吐き走りたり学び舎の庭寒稽古

初釜も変らずすみて年明けり心静かに平和なる日々

寒空さむぞらに陽ひだまり求めシクラメン鉢置き替える日々続くなり

シクラメン毎年求めし二鉢の寒さ厳しく花びらあわれ

吾わが歳としをつくぐかぞえ数える日々なるが心は変らじ若き日と

元気に振舞ふるまう吾なれど他から見れば老婆なりやと

お正月

東京 富岡 和子

お隣りのお節料理の気配して我が家はいまだ晦日中

平和あれ偏えに願う元旦に朝日を浴びるシクラメン鉢

臘梅が咲き始めたと友来る祝詞とかほり初春しみて

お正月火のおきている長火鉢心静まる鉄瓶の湯気

初たより子等は背丈を更に増しどちらが親か眺めるフォート

和食にて新年会の昼の膳着物の友のなくて久しく

久方の初春^{ハツハル}新派舞台みる遠く明治の一代女

ひと鉢のバラのうえ換え寒の昼張り過ぎた根は罅^{ひび}われおこす

松過ぎて咲き始めたる紅梅は春はそこにと愛ほしみいる

なつかしむ大変動の街シブヤ地上路線はすがたを消した

文学散歩

新城 半田うめ子

文学散歩思ひ出すなり眺めつつ円空仏と江南の藤

木曾川の水は美しく流れよく小魚の居りし楽しみて眺む

野田橋より眺めゐるなり今日も又おきな魚数匹居りぬ

吾が町の六けん長屋さびれたり幼き日のにぎやかでありし

老いて今六けん長屋の友をさがす神谷様とてやさしき人なり

クラス会幾年前か会食をしたりきなり杉山の店にて

吾が町のさびれて行きし吾が行きつけの店も閉店

わが友のやさしかりしの文学を教へて下されき牧野先生に会へぬ

やさしきの牧野先生いづくにての生活かと思ひつつ居りぬ

雪解け

豊橋 伊与田広子

雪解けの水流れ来て川となるタクラマカン砂漠テレビに見入る

流れ行く水を飲む人子供らは川に飛び込み楽しげなりたり

判事補にて借家に入りし人ありきそして高裁長官になりたる人を

フィリピンに吹きたる風は百メートル日本にも吹くことあらむと

テレビに見る火山を利用し発電を火山国のニュージーランドは

原発の代かわりに火山の発電を日本国中相当出来む

バレンボイム相当曲変へ指揮をするウインファイルニューイヤークンサート

定番の白き青きドナウは名曲なり何時聞くも心安まるなり

真夜中に夢中になりて聞き入りぬベルリンファイルのジルベスターコンサート

健康で長生きするにはストレスの解消せむと思ひをりたり

午 年

名古屋 近藤 映子

師走一三日初孫誕生の知せに吾久しぶりの嬉しさ

わが夫に待ちに待ったこの朗報見舞ひ伝へど眼開くのみ

わが夫に最速朗報伝へんと吾は見舞ひに走りぬ

わが夫の耳元にそつと貴方も私もジジババになったよ

われ夫をオジイチャンとそつと呼べば眼は吾をしつかり見ぬ

十二月残れる日々は十日無し夫の発熱気になり眠れず

兎角も夫の発熱下る様に何処に移動するも願ひたり

わが夫の一声成りとももう一度聞きたく声掛けぬ

わが夫よ新年穏やか迎えられし事嬉し嬉しや

わが夫よテレビ相撲をジット見ぬその顔を見てホットする

初詣

蒲郡 杉浦恵美子

悲しみは哀しみとして停まれどこの元旦のこの穏やかさ

夫の居ぬ吾が家に非ず旅先の神戸の宿に元旦迎ふ

初詣我が願ひ事何だろう今となつては叶わないこと

夕間暮れ我家に帰つて来たけれど何処も変わらぬ昨日の儘に

今までと少し変へましょお正月三年ぶりのお節の準備

芽を残し慈姑の皮を剥きながら夫思ひ出づ好物なれば

幾たびも重箱の蓋開けてみる黒豆色艶今年もよろし

去年は叔母おとし一昨年友の許なりき今年初めて独りの正月

階段を昇降するたび夫思ふ壁に小さき三角へこみ

西浦村藤三郎と申す者下呂へ湯治に行ったとき二百年前の往来手形

フロントガラス
豊川 平松 裕子

枯れ枝も枯れ竹もまた大き石流れ阻みをり沢の洗ひ場

浅き沢の大石小石を掘りおこす使ふことなき我の洗ひ場

沢までの階段なども掃き清め常と変らぬ正月二日

賀状書くことなくなりし亡き人の去年の賀状読み返しをり

包装の壁紙一枚に記されたるかすれて大き文字に出会ひぬ

正月の花を切らむと竹藪に入りて会ひたり実生の千両

譲葉も男松もつひに探し得ず道なき山の斜面を下る

金星と三日月の距離は幾ばくかフロントガラスの中に収まる

闇に走る我の車のフロントのガラスの中に月と金星

朝といへど未だ明けざる闇の中午前六時の月は中天

冬瓜

豊川 山口千恵子

幾処も土隆起させつつ土竜らは地面の下に幾匹生きゐる

広々と鋤き平らめし冬の田に動めき群るる野鳩幾十

軒下に冬瓜五つころがして山のお寺の静かなる冬

大寒の光さしゐる窓の辺に葉青々とわがモンステラ

大小の黄の実冬日に輝やけり大粒キンカン今年実を付くる

やはらかな午後の光を背に受けてわが影長し佐脇の道に

おだやかな午後の日射しを受けてゆく心たひらに次第になりゆく

足先に電気あんかをさぐりたり起き出づるには未だ早しと

カッカツと高鳴きしつつ杭の先ジョウビタキなりとひとり決めゐる

庭の杭に今日も止まりて尾を振れり胸燈に美しき小鳥

丹精

豊川 小野可南子

振り返り振り返りして白鶺鴒大根抜かむと行く我が先を

若みどりの莢豌豆をひと握り正月の客の澄ましの色に

うつすらと月の型の見えてをり冬冷え冷えと朝となりゆく

夕べなほ霜に凍れる鉢土にミニアイリスの細き尖り芽

あはれともけなげとも見ゆる水仙の剣なす芽生えは庭の片隅

手術待つ兄と語らふ幼な日のあのことこのこと取り留めもなく

ペースメーカーたしか確かに機能する兄の手指に赤きざしきぬ

兄は父に私は母に似てきたとしみじみと言ふ末の弟

蕾ややほぐれて紅くれない見え初たまむる矯すかつ眇めつ丹精の夫

紅きあり白あり盆梅五鉢を日差しを追ひて並べる夫よ

あらたまの歳を

豊川 夏目勝弘

本宮の山を正面に上る坂この北風に脚力およばず

墓参りに支障なきをと水道に凍結防止にプチプチを巻く

今日は寺明日はお宮の門松作り女松は手近かな米松を代用

北風にペタル踏む足つかれこし一息入るるは赤信号なり

メ縄を届け終へたり朝の日の差し込む間を読みさしの続き

裸木を下より見上げて帰りきぬ今日は大根を銀杏切りとす

正月が自由に時間使へる今ぞ神社仏閣の賦役の忙がし

大晦日は早ばや蒲団の温もりに午前五時より神社の賦役

のどあめをふふみて寺の受付に今年の初日はこの境内で

門松を作りて今日は片付に自由人となりて三年目

キヤタピラー

「招待」 秋山逸穂

あたたかき図書館をいでゆく夕べ落ち葉とともに坂くだりゆく
重だるい足をひきずり帰る道うすずみいろの空に圧さるる
明けてゆく空にまたたく北極星のうすらぐまでを静かにおりぬ
キヤタピラーがアスファルトを削り進みゆく夜の明けたればその跡白し
早朝の陽射しあふるる大通りに下りいるからす影さえ長く

福分け

横浜 阿部淑子

到来の数多あまたな菓子あまをジャンケンで夫と分け合あいあいつか幼子わさなご
夜半の時こむらがえりに悩めども朝日を受けて軽き足どり
マイナスの気温にめげず枝々はすつくと伸びて春を待ち居る
街中で物忘れすると口々に認知症恐れつゝいつか笑いに
ラッシュ車内臘梅の花かかえ乗る他人ひとに縁いっしあり福分けの一枝

磯波

豊川 白井 信昭

ようやくに新しき年の朝の陽の柔らかき光の窓の辺に届く

磯波の波頭しろく幾筋も沖の護岸に打ち寄するなり

食卓に息災を祈りこの年も七草粥の一杯より始む

「歴代天皇御製歌」(二十二)

貫名海屋資料館

『平城天皇』^{へいぜい}第五十一代・在位八〇六年(三十三歳)―八〇九年(三十六歳)

平城天皇は、桓武天皇の第一皇子、病弱であったため在位は短かった。

嵯峨天皇が葉子の官位を剥奪する。葉子の變が^レあった。

八二年、四十八歳の時、空海から、「灌頂」(仏弟子が一定の地位に進む)を受けた。奈良を愛されたゆえ「奈良帝」と称された。

ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり 古今和歌集 九十

古びて荒れた里になってしまった奈良の都にも、昔と変わることなく花は咲いている

萩の露玉にぬかむととれば消ぬよし見む人は枝ながら見よ 古今和歌集 二二二

萩の露は糸に繋げようとすると、消えてしまった。露を見ようとするには、萩の枝のまま見るが良い。

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

久々に会ひたる友は髪短くし定年後の夢こもごも語る

わが建てたる旧居は空きて三年過ぐ見やれば未だ活くわしの匂ひ

水野絹子

祖母われの強き声援届きたるかマラソン大会のゴールの一步よ

一輪の蕾の寒椿いただきてわれの暮らしの潤ひくるごと

牧原規恵

母の着し昔の和服をリフォームす着たれば若き頃の母に似て

畑よりの青首大根厚目に切りおでん作らむけふ子が帰郷する

稲吉友江

手を振りてかけてくるくるかつての友ばったり出会ふ「飛鳥Ⅱ」にて

のほり来し母校の坂道天下坂今しも巨きま赤き入り日が

鈴木美耶子

池坊の全国華道展に参加して楚々と咲く黄の糸菊生ける

エゴの木の裸木となりてその根元緑の苔の広がり眺むる

吉見幸子

吹き抜けのエスカレーターにいざ乗らむ声かけあひて母の手握る

「ごちそうさん」のごときま白き割烹着母も掛けゐしその姿うかぶ

牧原正枝

夫の作る葱大根の土にはふそのまま娘の家に届けむ

懐しくも藁に包めるこの納豆子供の頃の朝餉思ひ出す

岩瀬信子

くれなゐに混りて白き山茶花の今日も咲きをり冬ざれの中

大輪の菊と深紅のカーネーションどなたかしらね夫の墓前に

石田文子

花びらの凍え咲きをりこの桜今日ほつほつの初雪の降る

わが歌を初めて色紙に書いて飾る公民館まつりの今年の正月

森厚子

通り道の庭に咲きゐる四季桜しろじろとしてひそやかにして

柚子の実を浮かべ冬至の湯につかるこのひとときの私の倅せ

山崎俊子

一鉢毎声をかけつつ水を撒く夫の遺せしこの黒松に

百日忌過ぎしも空白のままの日記やうやくけふから書かむかと思ふ

三田美奈子

『俳句』

トンネルを抜け初富士にぶち当る

植村公女

凧上げや空ゆるやかにすべりて来

小椋桂の声根やはらか冬の雨

眠る山春の支度の中にあり

一石

新年や宇宙に心あるか問ふ

想像は宇宙の果てに冬銀河

『かさね』の一句 二月号

掃くといふ事の楽しや山茶花咲く

佐藤喜仙

ふろふきやうからの一人づつ思ふ

松本周二

浮寝鳥しばらく流れ又もとへ

古川千鶴

土間抜くる風に味増す塩引鮭

川井素山

咳がでて居留守使えぬ冬日かな

田島昭久

立入りを許さぬ庭の冬紅葉

小池清司

看護師の掌に書くメモや十二月

長久保郁子

短日や道よぎる猫急ぎ足

岡野安雅

方言の飛び交ふ街や聖夜祭

米田文彦

えんがはに老婆みねむる冬至かな

山本草風

日短や早起きをしてペンキ塗り

青木英林

尾羽上げそろゐて潜る夫婦鴨

田中清秀

スタンドに響くユーミンのノーサイド

丸山酔宵子

冬ざれや癌患者かぶるニット帽

池内とほる

山茶花や参禅の板文字薄し

和田勝信

さわさわと雨音のごと木の葉降る

森岡陽子

吐く息で眼鏡くもれり冬はじめ

橋本修平

誤作動の火災報知器冬の雷

小柳千美子

深更の手締め之音や酉の市

後藤克彦

銀杏落葉一枚本に挟みけり

柳田皓一

叡山に梵鐘響き紅葉散る

吉田博行

落葉散り空も落ちそな日本晴れ

長島清山

私の一首

のつそりと線路を歩むカメムシの命危ふし電車入りきぬ

夏目勝弘

豊橋駅の二番線のホームで帰りの電車を待っていたとき、レールを見ると一匹のカメムシが右手の方に歩いている。

車輪の当る白銀色に光る所を一直線に止どまることなく歩く姿をしばらく見ていた。

その時電車の到着のアナウンスが流れ、左手より電車が入ってきた。そしてゆっくりと前を過ぎ止まった。

カメムシの姿は見え、レールが冬の日を白く反射させているのみであった。

卵塊を産みて木の枝に登りゐるもりあを蛙を夫の指さす

林伊佐子

もりあお蛙は、天然記念物に指定され鳳来寺山に生息しています。同じ三河の里のわが家の沼地にも棲むようになつて長い年月が立ちます。六月頃沼地のまわりに白い泡のかたまりの卵を産みますが、木の枝に登つて二匹が卵を産んでいる姿は始めて見ました。雨蛙より大きな体型です。天敵のやもりは別の場所に移して、もりあお蛙の生息と自然の大切さを守っております。普段はどこかに潜み産卵期だけ姿を現します。

これは雑草これも雑草より分け抜きぬる我が朝のさ庭に

平松裕子

「これは雑草これも雑草とより分けて」としたつもりですが「と」と「て」が抜けていました。読んでいてリズムが悪いのと、意味が伝わるのかと不安になりました。「より分け」の「より」を「選り」とすべきだったと思いました。掲載されている歌ですと「雑草より分け」となり、「雑草の中から分け」というように取られるのではないかと思いました。

楽しみて西川辺を歩く眺めさわやかなりぬ白鷺しらぎの舞ふ

半田うめ子

歩く事にて身体を守る必要性、医師より聞き少しずつ実行して、又友人もやさしく言葉を下さいます。種々の鳥も舞って来て楽しいです。

ある自然科学者の手記 (22) 大橋 望彦

「生きている科学」①

先日、テレビで、生物学者で科学評論家の中村桂子氏の話を楽しむに伺った。彼女の論調は衰えず、的確、歯切れの好いのは変わりなかった。彼女は最近の科学者が、イノベーションに乗って、表面的に仕事をしているが、もう少し、生々しい科学をして欲しいという事を言いたいのだと云うことが読み取れ、拍手を送りたい気持ちであった。まさに、「科学」は生き物であり、生物を扱う科学者は、最も複雑な構成で出来上がっている生物の産物を噛みしめながら科学して欲しい。発想が生きていない。遺伝子の科学は、いまやDNAの時代ではなく、蛋白の時代に移っているが、生物のやっている根源の科学を追求する気持ちが足りないのではないか。今の処、DNAは遺伝子としては、蛋白の一次構造(アミノ

酸残基の配列順序)を決めているが、ポスト・トランスレーショナル・モディフィケーション (post-translational modification of proteins : 蛋白質の翻訳後修飾の過程) に関する情報も遺伝子に含まれているという証明はない。しかし、実際の蛋白質の働きは、この修飾された後に活性が、大いに左右されていることは判ってきた。複雑な免疫機構の解析には、この考え方なくしては解明され得ないであろう。ES細胞を使って、未分化な細胞が分化した機能を発揮もしくは獲得する際に、どの様な指令が授受されているのか、という機構の解明が出来る筈である。

等と考えていた処、とんでもないニュースが飛び込んできた。正に驚きというよりも仰天に近い衝撃的内容であった。それは従来の細胞学では考えられないようなことで (ES細胞の発見を含め)、如何に科学という生き物は常識というものの通用しない学問なのかをまざまざと突き付けられたのである。これが今、新聞や放送で盛

んに報道されているSTAP細胞の記事である。

若い日本の婦人科学者の研究業績であることがあまりにも全面に出ていて、内容の強烈さが薄れてしまうような印象も受けるが、細胞生物学を専門としていた者にとっては、いきなり頭から水を被ったような驚きであったのだ。

以下、「日本タイムス」の2014年01月30日号に記載された内容を基に紹介する。

日本の科学技術庁の所管する理化学研究所（神戸）とハーバート大学（米国）との共同で開発した、新しい幹細胞の紹介が英国の権威ある科学誌 *Nature*（ネイチャー自然）に発表された。この新しい幹細胞は、受精卵の細胞と同様な未分化な状態を、成熟した体細胞（一般に、一度成熟して高度な機能を獲得した細胞は、元の未分化な細胞には戻れないと言う常識があり、殆どどの体細胞はこの状態にある）のどんな細胞からも極めて簡単な方

法で創り出す事が出来ると云う事を示し、一つの科学に於ける光明を見出したものと言える。この『Stimulus-Triggered Acquisition of Pluripotency cells（刺激的惹起万能性獲得細胞）：STAP細胞』の発見は、医学、がん研究と共に、生物学の分野にも強烈なインパクトを与えるものであった。

実験では、生后7日齢のマウスから取り出されたリンパ球（有核）細胞を弱酸性の液（pH5.7）に約30分間曝さらした後、若干の生存した細胞（7～9%）を培養して増やした後（3～7日）、マウスに移植した処、それから細胞が神経や筋肉の組織に分化（多機能を獲得）したことを証明した。

絹の話 (40)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

将来の養蚕業

〔現状〕

世界では経済発展の著しい国々から養蚕業は衰退して
います（インドを除く）。日本では「養蚕、絹文化」を
残せと、各方面で色々な取り組みが試みられています。
しかしいずれも再活性化に繋がる確たるものは見つか
りません。例え繭が出来ても製糸屋、撚糸屋、機屋等のど
れが欠けても絹布は出来ません。国産絹は日本の絹需要
の0.5%（原材料から日本製絹100%と云う物は殆
ど有りません）に満たない状態で、特に繭を作る養蚕業
の従事者が高齢化して来て危機に瀕しています。

再興するとしたら、繭、糸、織等の豊富な経験者、技
術者、学者が高齢になったと云え、揃っている数年のう
ちに国家的プロジェクトで再起させなければ将来の見込
みは無いでしょう。アメリカの様に絹の古物や美術品の
修理、復元もままならぬ国になってしまいます。

イタリアの19世紀中頃に繭が採れなくなった後も
マイスター制度によって絹の染織に関しては世界に冠た

る技術を保持しています。美しいドレープ（ローマの貴
族の理想が脈々受け継がれているのか？）を作る技はイ
タリアの右に出る国は無いと思われれます。

またインドでは釈迦が着ていた褌（ひだ）しか見えない
様な薄物を手織りする技術を脈々と伝え、今日も需要が
有る事に畏敬の念を禁じ得ません。柔らかな薄物を織ら
せたらインドに勝る国は無いでしよう。

日本でも着物文化が上質な繭を求め、精緻な加工技術が
絹を守って来ました。能、お茶やお花、琴、三味線など
伝統芸能がそれを大いに支えています。

この様に、絹にはそれぞれの国の文化や思想が息づいて
います。数千年の歴史を持つ絹がどの様に生き残るか興
味は尽きません。

【食べる絹、医療用絹の生産】

世界の人工は21世紀末には100億人を超えると予測
されています。食料不足は深刻になります。地球温暖化
により耕地適地の減少が憂慮され、農作物を食べるエネ
ルギー効率の悪い哺乳類動物の蛋白摂取は発展途上国の
食料事情を更に深刻なものにするでしょう。

家畜化された家蚕は60日以内で必須アミノサンを含む人
に有効な蛋白質を種の1万倍の生産をします。世界でこ

れほど効率の良い蛋白質生産システムは他に例が有りません。しかもアレルギー等を殆ど起こす事はなく、高血圧や肥満予防、ばけ防止、癌細胞活動抑制など成人病抑止に極めて有効である事が明らかになって来ましたので、今後の人類の有望な蛋白質源と見なされ始めました。

今日の多くの食品（キノコ、野菜、鶏など）が工場的な生産設備の中で生産される様に、家蚕はシルクの中でも無菌培養によって安全な食品として大量生産出来る事が可能になりました。絹の食品化事業の始まりが目前になって来ました。私共（ワイルドシルク協議会）は東京農業大学、東京聖栄大学と産学協同で「美味しく絹を食べる」事に6年取り組んで来た結果、粒子の大きさを特定し、シルク蛋白の匂のしない安価に出来るシルクパウダを使い、滑らかな食感のパンやケーキ、ピザ、アイスクリームなどを作る事に成功しました。

ところが、わざわざ糸になった物を時間と経費を掛けてパウダやゲルにしなくても糸を吐く直前の5齢の3日目目の蚕の方が美味しく（蜂の子の味）遥かに加工費が安く出来るような事が判つてきました。

「やせるシルクドリンク」などヒットしたら養蚕事業は先進国の都会の衛生管理の行き届いたビルの中で大量生産する時代が来ると思われれます。

一方、絹は非常に親和性に優れていますので、新たな医療用品として人工皮膚、軟骨、超薄ガーゼ等利用が期待されています。

【三極化する養蚕業】

一つは、目的に合わせた物づくりの為、高価でもよい繭作り。それぞれの目的物に応じた蚕の品種の保存管理が大変ですが、それが無いと困るものが有ります。繭は時代によって大きさも形もちがいが、糸の太さや艶が違うので各時代の古物修復の為にその時代の繭が無ければ、修復になりません。また能衣装や高級呉服等も繭を選びますので、温故知新の養蚕業が要望されます。

二つには、一般消費材用繭作りで、世界の経済発展の遅れた地域の産業として推移してゆくでしょう。

三つには非繊維素材生産の養蚕業として、医療資材用、食品用など都市や加工工場に隣接する地域で四季を問わず休み無く繭作りが出来る近代産業として再発展する可能性があります。但しその様な地域では桑の葉で飼育は不可能ですので、人工飼料がどこまで安くなるかに掛かっています。それが出来なければ中国やタイ、ベトナム等から5齢の3日目の蚕やそれをクラッシュした物が冷凍輸送される様になるかも知れません。

物理学者と詩歌の世界 (50)

一石

ヘラルデイス・トホーフト

ヘラルデイス・トホーフト (Gerardus 'tHooft、1946—) はオランダの理論物理学者である。デン・ヴェルデンで生まれた。大おじにノーベル物理学賞受賞者のフリッツ・ゼルニケ、おじに理論物理学者のニコラス・ファン・カンペンがいる。トホーフトは1964年ユトレヒト大学の物理学科に入る。1971年、ユトレヒト大学院生の時、指導教授のマルティヌス・ヴェルトマン(参考資料2)からゲージ理論によって弱い力と電磁気力を統一しようとする試み(電弱理論)に残されていた未解決の課題を与えられたが、それを1年あまりで解決した。この研究は博士論文として発表され、その後量子色力学(QCD)を發展させる重要な業績となった。博士号取得後、CERN(ジュネーブ)、米国スタンフォード大学、ハーバード大学などで研究。1977年ユトレヒト大 学理論物理学研究所教授に就任(参考資料1)。

トホーフトはヨーロッパ物理学界において「車椅子の天才」ホーキングと並び称せられる存在である。研究テーマは次の3分野に渡る。

1) 素粒子論におけるゲージ理論・電弱統一模型の繰り込み

可能性の証明、非可換ヒッグス理論における磁気単極子(モノポール)存在の証明、可換ゲージのQCDにおけるモノポール出現の証明など。

2) 量子重力とブラックホール・ホーキングの「ブラックホールの情報パラドックス」の解明。

3) 量子力学の現代的解釈・ホログラフィック原理(注1)など。

現代物理学におけるこれらの顕著な功績により、数多くの賞を受賞した。米国ハイネマン賞(1979)、イスラエル国ウルフ賞(1982)、ローレンツメダル(1986)、フランクリンメダル(1995)、「電弱相互作用の量子構造の解明」によりノーベル物理学賞をヴェルトマンと受賞(1999)。弟子にダイクラーフ・ヴァッフア理論のロペルト・ダイクラーフがいる。

一般読者向けに書かれた著書に『未知なる宇宙物質を求めて』(森北出版)がある。

トホーフトについてのエピソード。

1) トホーフトは学会にも多く出席するが、ホールで他の著名な参加者と政治的交渉をしているわけではない。どの分科会にも顔を出す。毎朝いちばんに、隙のないスリーピースを着てやってくる(他の参加者はたいていジーパンとTシャツである)。一日中最前列に座り、駆け出しの研究者の発表も聞く。いつも意見をいうわけではない

し、ちよつと居眠りをすることもあるが、一人一人のた
めにその場にいることで示す敬意は見事なものである。
自分が話す番になると、立ち上がって自分のアイデアと
結果を控えめに発表する。彼ほど誠実でまじめな人物は
いない。自分が孤独な道を進んでいることを本人も承知
している。(参考資料3)

2

20世紀後半の素粒子理論における最大の発見の一つに
「漸近自由性」がある。2つの粒子の間に働く重力やクー
ロン力などは通常、粒子が近いほど強く、離れるほど弱
くなる。これに対して、クォーク間に働く強い力は、離
れているほど強く、近づくにつれて弱まっていく。この
「漸近自由性」こそクォークが単独で観測できないこと
の理論的な裏付けを与えるものである。

この重要な性質を最初に発見したのは誰であったか。漸近
自由性を研究するためには「くりこみ群」と呼ばれる数学的
な手法が用いられる。あるシンポジウムでくりこみ群の専門
家(ジマンティック)が発表を行った際、「理論中に現れる
特定の係数は通常プラスだが、これがマイナスになると奇妙
なことが起きる」と述べたところ、トホーフトが、ヤン・ミ
ルズ理論ではマイナスになるとコメントした。この話を耳に
した米国の理論物理学者ポリツァーとグロスが確認のため
に計算を開始、当初、グロスは正しい結果を得られなかった
が、ウィルチェックと共同で再計算をして「漸近自由性」を

確かめた。結局、トホーフトは論文を発表せず、ポリツァー
とグロス/ウィルチェックの論文が米国の学術誌の同じ号
に掲載され、公式には、この3人が同時に漸近自由性を発見
したことになって、2004年のノーベル物理学賞が授与さ
れた。

注1:「ホログラフィック原理」とはトホーフトと米国の理

論物理学者レオナルド・サスキンドが独立に1990
年代半ばに定式化した理論。われわれが空間と考えて
いた領域で起きることはすべてその空間を取り巻く
表面で起きていると考えられる。さらに、その境界面
に存在する世界の記述は、量子論ではなく(それに置
き換わる)ある決定論的な理論である、と主張する(参
考資料4)。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia Gerardus 't Hooft
- 2) 三河アララギ, P 44, 第60巻, 第12号 (2013)
- 3) リー・スモーリン『迷走する物理学—ストリング理論の
栄光と挫折、新たな道を求めて』(ランダムハウス講
談社)
- 4) レオナルド・サスキンド『宇宙のランドスケープ』(日
経BP社)

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

一三 高安国世 1

遠方^{とほち}にて我を^{とほち}はげまし給ふ君何の縁とたふとみまつ
る
昭和十五年 『Vorfuhring』

作者によるとアララギに入会、土屋文明に師事し始めたのは二十一歳のときだという。そして、茂吉に会ったのは翌年であり、その後、訪ねる度に親切にしてもらったという。右の歌集の「あとがき」にいわく。「上京の折々にも、母からの伝言もあつて先生をお訪ねするのを例としたが、お忙しい折にも必ず引見して下さるのであつた」
「先生から当初から、『歌は土屋君にまかせてあるからいいが、僕は一つ他の方面で応援をするからね』と言つてお励ましを下さつた」と。

右の歌は、昭和十五年に新聞に書いた「ロダンとリルケ」を送ったとき茂吉から「ていねいな批評を添へて有難いお葉書を頂戴した」ことに基づくようである。作者は、「思ひがけぬ先生のお葉書に僕は興奮を感じながら……田圃道を先生の『文章コクあり又新しい』といふ言葉をくりかへしくくりかへし味ひつつ歩いた」と続けてい

る。また、「僕が僅かながらも文学方面での仕事を果しつつ世に出ることになつた背後には、先生のお力が隠れてをり、……絶えず最初のお言葉どほりに援助してゐて下さつたことに気付くのである」とも。

雨のふる畦にとび下り立たしたりき草を映して小さ
き泉に
傘の下にフィルム巻きかへたまふさへ素速かりにし
忘ることなし
古ゆ今にゆたかに此の土にとほれる水を御井^{みい}とたた
へき

題に「藤原御井」、左註に「斎藤茂吉先生に随行す」とある。柿本人麿研究の一環「藤原御井考」のための調査で藤原宮址付近を涉獵する茂吉に随行したことを詠んでいる。一、二首目には六十歳の茂吉の若々しさ、敏捷さが読み取れておもしろい。作者はこの翌年にも藤原御井を調査する茂吉に随行している。

戦の日に山峡に詠みたまひし歌しづかにてたぎちく
るもの
つひに歌はかくも烈しく寂かなるものと思ひて頭垂^{かしげ}
れつつ
昭和二十四年『年輪』

これは、たとえば、昭和十八年から敗戦までの作品を収める『霜』（昭和二十四年刊）を読んでの思いであろう。「底」もり鳴りてきこゆる山みづは絶ゆることなし迫るがごとく」「あしひきの山のはさまの星づく夜われのうちより迫るもの何」などを思い浮かべてもかまわないだろう。

斎藤先生かつて此の島に人知れず来り給ひて帰れたまひき

同

人知れずこの狭岑島に漕がしめて島の写真を撮りたまひしと

一首目には「狭岑島」と註がある。茂吉が昭和十二年五月に、人麿が溺死者を見て詠んだ讃岐の狭岑島を訪ねたことを詠む。二首目は、万葉集に出てくる「加古の島」を調査、撮影するために漁舟を雇って海に出たことを詠む。

歌詠みて一生を老いむ侘びしともいさぎよしとも旅にして思ふ 昭和二十七年『夜の青葉に』
歌詠みて一生を老いし斎藤茂吉の写真を見居りこの寂しさや

この歌を詠んだころ作者は、ドイツ文学研究者として

まだ海外留学をしていないことへの焦りを感じていたように思われる。研究を傍らに置いて歌詠みとして生きるのは「侘びしともいさぎよしとも」感じられることであって一歩が踏み出せないというのが一首目であり、一生を歌を詠んできた茂吉を思ってもやはり「寂しさ」を禁じ得ないというのが二首目である。

四十にて茂吉留学せしことも我の一生に幾たび思ふ

同

茂吉が海外に留学したのは四十歳のときであったことを作者は遅いと思っていた。作者はのちに歌集『砂の上の卓』後記で、「かつて僕は茂吉が外国留学したのは遅すぎた……と惜しんだ」と述べたが、本人が留学したのはもう四十五歳を過ぎていた。

茂吉解剖所見つまびらかに読み終り寝しかばこの心寂しさ 昭和二十八年 同

茂吉が死去したのは昭和二十八年二月二十五日で、遺体は翌日、東京大学病理学教室に運び、三宅仁教授執刀、平福一郎助教解剖介補のもとに解剖に付した。歌はその所見を読んで寂しさを感じたと詠んでいる。

楽しい時間 16

山本紀久雄

2014年1月31日

人は変化することで成長するものである、といつも思っている。だから、何かの機会に「変化」に気づいたとき「楽しい」と感じる人が多いが、このところ久し振りに「トランジット・ポイント」を三回体験した。「トランジット・ポイント」とは「閥値・スレッシユホールド」ともいうが、ある一定の感覚・知覚から反応が変わってしまうポイントのこと。例えば、痒いところがあるからといって、そこを掻きすぎると気持ちが悪くなったり、刺激されすぎて「やめてくれ」という気持ちに逆転してしまうような変化点をいう。

その体験の最初は温泉でのこと。家内と秘湯温泉めぐりをしようと、1月は福島市からバスで約一時間山に入った標高1200メートルの野地温泉を訪ねた。周りは磐梯朝日国立公園、部屋の窓から福島市が見下ろせる「雲上の湯宿」である。このフロント立つと「風呂の人気度日本一」と自慢げに掲示されている。その自慢の風呂は六か所。いずれも湯量が豊富で、源泉から溢れるばかりに注いでいる。最初に入った「剣の湯」、ゆっくり浸かって窓越しに積もった雪の量に驚いていると、突然「ドーン」と轟音



が発し、屋根から雪と氷柱が落ちてきた。すごい音だったと思いつつ、ふと、風呂に注ぎ込んでいる源泉を触って驚いた。それまで51度という湯がどうとうと豊かに流れ込んでいたものが、豊富な水量は変わらないのに、冷たくなっているではないか。察するに、雪が源泉湧水地に落下し入り込み、一瞬にして熱湯が水に変わったのだ、と思う。初めての体験でびっくりすると同時に、これは物理的な「トランジット・ポイント」ではないかと感じ、楽しいびっくり変化である。

次の「トランジット・ポイント」は千葉県館山市の寿司店での体験。館山は寿司が美味いといわれている街。駅近くの寿し甚で寿司を食べながら思い出したのが映画「武士の献立」の一場面。主演は高良健吾と上戸彩。江戸時代、大名家には主君とその家族の食事を賄う武士の料理人たちがいた。食材選びから、毎食の献立を考え、調理し、時には諸国大名をもてなす豪華な饗応料理を仕切る。この刀を包丁にもちかえて主君に仕える武士たちを、人々は椰揄と親しみを込めて「包丁侍」と呼んだ。

その包丁侍・加賀藩の舟木安信と妻の春の物語であるが、安信の調理腕前はやる気も含めて問題だった。調理に関心が薄く、嫌々親から包丁侍を受け継いだのでモチベーションがもともと上がっていない。だから、親戚方に料理を振る舞う席でも不味いと指摘されてしまう。

その様子にいたたまれなくなった春が、次の膳に出す汁椀をこっそり作り直したところ、その圧倒的な美味しさに親戚一同感心し、会は無事終了した。だが、安信のプライドが許さず、嫁のくせに勝手に手出しするとはと激昂。

そこで春は安信に包丁の腕比べを申し出る。安信が勝れば

春と離縁。春が勝てば、安信が春の料理実技指導を受け入れるという条件で。腕比べの材料は「鮒の刺身」で、二人が刺身にしたものを食べ比べる……。結果は春の断然勝利。包丁の使い方が段違いなのだ。

このことを寿し甚の主人に話すと「そうですか。ではやってみましょうか」と冷蔵庫から持ち出したのが鯖で「これを刺身にしてみましよう」と出してくれたのが写真。食べてびっくり美味いという一言のみ。

時折、魚屋に三枚おろしにしてもらって刺身を自分でつくり食べるが、その味わいとは全く異なる。さすがプロと唸り、自分の包丁使いとの差を確認したが、これも一つの「トランジット・ポイント」体験ではないかと思ひ、刺身は専門家に敵わないと悟った次第。

三つめの「トランジット・ポイント」体験は失敗話でもある。「月末の日曜日、友人グループを自宅に招待した。「武士の献立」と寿し甚の経験を活かして、刺身はさいたま新都心の明治村の魚屋に調理してもらい、そばも食べてみて美味いと感じた野州うどん屋から取り寄せ、温かいキノコ汁で。そのほかに家内がつくった山菜の古漬け、葉唐辛子の甘辛煮、寿し甚からいただいた金目鯛の頭で煮込んだ大根・里芋・人参・牛蒡、サツマイモの茎の味噌佃煮、それとサラダと



かいろいろ。デザートは友人の娘さんが作ったロールケーキ。

乾杯は地元志向で川越の Ceedo ビールと、オンライン限定販売の Grando Krim. Ceedo は瑠璃・漆黒・紅赤・伽羅の四種類。これをそれぞれ選んでいただき、「カンパニー」「チーン」。

瑠璃を選んだ女性は、香りがよい。さわやかという評価。漆黒を一口飲んだ女性は、これはアペリティブにぴつたり・コクがあるとの発言。逞しい男性は紅赤、ちよつと軽い・コクが今一つだという。これに男性の奥さんがクレームをつけた。実は奥さん Ceedo の隠れファン。原料に

川越名物のサツマイモが使われているからだと言論。自分は伽羅だったが、一口飲んで「これは頭にきたな」と感じる。いつものビールと異なる。通りがよいというか、アルコールがストレートに喉から脳細胞に回っている。つまり、一口で酔ってしまったのだ。

何故今日は一口で酔ったのか。それには様々な理由があるが、結果は「同じことを繰り返して話す年寄りになった」と家内からバッシング批判。

その通りで Ceedo ビールが、己の中に隠れていたマイナス部分特性の「トランジット・ポイント」を引きずり出してくれ、これからさらに年寄りになる未来への警鐘となった。だがしかし、逆に、これは自分を知る「楽しい時間」であったと慰めているところ。以上。



子規の短歌革新とアララギの歌人 (20)

佐藤 喜仙

(三) 歌よみに与ふる書―第九回―

今月の要旨

① 金槐集四首並びに新古今数首の批評

「一々に論ぜんもうるさければただ二、三首を挙げ置きて『金槐集』以外に遷り候べく候」

山は裂け海はあせなん世なりとも君にふた心われあらめやも

箱根路をわが越え来れば伊豆の海やおきの小島に波のよる見ゆ

世の中はつねにもがもななぎさ漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも

大海のいそもとどろによする波われてくだけてさけて散るかも

「箱根路」の歌は面白いが、着想は古今集に通ずるものである。「世の中は」の古い調べは万葉調であり、新古今時代に実朝がこの様な詠みをした伎倆には驚かざるを得ない。これより新古今数首

なごの海の霞のまよりながむれば入日を洗ふ沖つ白波

(実定)

この歌の様に客観的に景色を詠んだ歌は新古今以前には存在しない。新古今の特色がそこにある。

ほのぼのと有明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風

(信明)

この歌も客観的で、景色も淋しく感じるが言葉を畳みかけて調子をととのへているところが良い。

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵を並べん冬山里

(西行)

西行の歌では「心なき身にも哀れは知られけり」などという感情を露出した歌が世にもはやされているが、西行の本来の心はこの歌に現れている。「庵を並べん」という斬新にして趣味ある趣向は西行ならではのものであろう。

神風や玉串の葉をとりかざし内外の宮に君をこそ祈れ

(俊恵)

神祇の歌といえは千代の八千代のと定文句を並べるのが常であるが、この歌は言葉が引きしまっていて、「神風や」の五字も訳なきようではあるが極めて響きが善く神祇の歌にふさわしい。

長塚節の病・恋・短歌

夏 目 勝 弘

節が神田区錦町三丁目橋田病院に入院したのは大正三年三月十四日（明治三十一年にチブスで明治三十二年に胃腸傷害で入院）。

五月二十九日までの七十七日間、大切な患者ということ、小井土ぬい子という下仁田の十八歳の美人が選ばれた。

○白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水汲みにけり

入院中の節のもとへ、茂吉、千樫、赤彦、憲吉らがしきりに訪問「僕の歌に対する考えはまずこういうものかも知れない」と言つてこの歌を示した。

茂吉がねばり強く、こうゆう歌をもつと見せてくれと頼み込み五月号「アララギ」から「鍼の如く」が載るようになった。作歌することから二年余遠ざかっていた節でも何かの刺激がなければ、氣持を振り起して始めることは出来ない。

（白埴）の歌が巻頭に載つた「鍼の如く（一）」が、大正三年六月号「アララギ」に載る。

（二）が七月号（三）が八月号（四）が九月号（五）が大正四年一月号。

時折り高熱に苦しめられながら（不眠のため歌が出来る）と日記にある。

こんな体調でありながら大正二年八月十四日退院し十六日人吉温泉、小林を経て宮崎へここでは肺患らしいと宿変を言われる。九州各地を巡り、九月二十二日博多に帰る。

黒田でる子が根岸養生院に見舞に来てから七十通余の手紙を送っているが、一通の返事もこない（手紙はすべて家族に差し押さえられていた）。

てる子より消息がなく、晴れない日が過ぎてゆく、そんな

思いを山茶花の花に。

○山茶花のはなは見果て、去らなくに人は在処も知るよしもなし
念願叶つて二人の再会が実現した。節が入院してから彼女は三回見舞に来ていた。

五月三日午前十一時訪来午後三時迄在院
五月六日午後四時訪来九時門限迄在院

五月十日午後二時訪来九時門限迄在院
節の病床日記に「彼女の帰りし後はいつも心中に泣く」と

てる子よりの最終便に（―生きざれば―私はその間いつまでも心に待っています（略）あなたは是非どうあつても御體をおなおしして下さい。何も御考えにならずに只それ丈を今頭にお置き下すつて、どうあつても幾年かかろうとも丈夫におなり下さい。ようござんすか、しかとお願致しますよ。

この手紙を心の頼りどころとし、三度療養のため福岡に向う。六日の午後二人はひそかに相会した。それは古泉千樫が介し機を作らる。

てる子は白バラの花を節に贈り心からの祝福をした。彼女は長塚家に節の看護を申し出るも聞き容れられなかった。

大正二年七月七日東京を発ち十日博多着。博士の診察を受ける。

大正三年十二月一日（歌に骨折る）と八日「アララギ」に原稿を送る。最後の作品となる。九日に患部の焼灼、痛が続くため十八日高崎医師と入院につき相談するも、空床なく入院出来ず。

大正四年一月四日夜、大学病院南隔離病棟第六号室に入院。八日「苦しきこと限りなし、然し咳は出ず、便所に立つに足のふらふらに驚く」と病状を記したのが最後に日記は終る。

二月八日午前五時昏睡状態、午前十時死去。

「氷魚」のことから (158) 岡本八千代

最近、伊集院静著の「ノボさん」を読んだ。それは、正岡子規と夏目漱石のことが小説として書かれている本だった。(講談社)

その本から、子規の小説観を垣間見た。その本の中(139頁)に、子規が小説を書いていることに漱石が驚いている会話がある。

子規…「あしが思うにこれからの新しい創作は短歌でも俳句でもないな。小説の中に新しい世界があると思う」とらい

漱石…「それはどうしてだい？」

子規…「小説には短歌や俳句のように定型の枠がない。自由じゃ。そこに新しい世界がひらける可能性がある。自と思ふとる」「それが写生じゃ」

彼は「目に映るものを活き活きと書いてゆく。今までの日本の小説は人間の動きにしても物語の筋書きにしても皆同じじゃ。それでは生身の人間は書けん。」とも言ったりして。これは伊集院氏の子規の小説観のとらえ方ではあるが、私もなんとなくわかる気がする。

さて、子規の小説「我が病」第四回を。

第四回。眠られなかった翌日の記者たち。

・新聞記者だけ上陸を許された。

籠の鳥が籠を離れたような思い―。

・棧橋の上には無数のきたないチャンが群れて荷物を運んでいる。

・金州街道が一目に見えてる処の様子。

・麦畑に街道をつけたよう。―平地のような勾配の山。 秃山と同じ色の麦畑。

・大連湾から一里餘り来た処に小さな家が山腹にあつて日の丸の旗が立っていた。そこに日本人の茶店があつて一服。―

・そして金州城が見えてきた。城門、その上の城樓が真赤。「愉快でたまらん」と。

・金州城の郊外―路ばたで葱や卵を売る。買っているのは日本の軍人であらうと。

・城門は二重門。家は低い平屋で石畳。大通りは大方店を開けて商売、店先の戸口や壁に赤い紙をべたべた貼つて縁起の善い事が書いてある。

・支那の城は、郭で、人家があるばかりで天主閣はない。高さ五間ばかりの城郭が四方に築かれている。門は東西南北の四処にあいている。その他には蟻の通るほどの穴もない。

・南門から北へ一直線についている道と東門と西門とを連ねている道との二つの大通りであつて、その二條の大通りが交叉している。その真中に關帝の廟がある。往來の通行人は皆日本人。商売をしている人は皆支那人。

・路傍で売っていた鶏を二三羽一円五十錢で二羽買って、土産に第二軍の新聞記者の宿へ行って、一夜泊めてもらった。余は寢処が狭かったので、チャンの家へ行って寝た。チャンの寢床は臭い匂いがした。

次回へ

ことのはスケッチ (423) 今泉 由利

『貫名海屋 私注』③

亡くなった母は、お寺様より「蓮月」という戒名をいただきました。呼び慣れた母の実名でないのが、とても寂しかったです。けれど気付いた。

幕末から明治にかけ、美しい歌人「太田垣蓮月」のおられることを。

学生時代、たまたま入った骨董屋でみつけた。蓮の葉が受ける形の手に載る器、釘で引き掻いたような、美しい仮名字の和歌が書かれていた。思わず買ってしまった。

後になって知るのだけれど「蓮月尼手ひねり」でした。

一人で部屋に籠っているときは、この器で、蓮月尼を心にいっぱいにしてお酒をいただくのです。

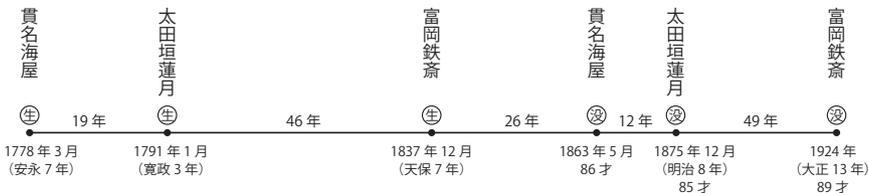
蓮月尼と同時代、同京都、同芸術家……。その時は、書家として大きな名になっていた貫名海屋が、微醺をおびると、常に吟じたという。蓮月尼の和歌

○山ざとは松のこゑのみき、なれて風ふかぬ日はさびしかりけり

蓮月尼は、貫名海屋に書を習われたという。芸術家同志の心のふれあい！美しい。

富士山の噴火口。ものすごい勢の絵に出逢った。富岡鉄斎座右の銘「万里の路を行くは画人たる第一歩」。

鉄斎は、富士山に登頂されたのです。



蓮月五十回忌法要をいとなんで鉄斎は没した。

1898 鉄斎、屏風「富士山図」を制作。

鉄斎、富士山に登山。日本各地を旅し自然を写した鉄斎、つつましいお墓。

鉄斎の筆「太田垣蓮月」とだけ記された。

蓮月は松村景文について絵を習得。

蓮月、丸太町橋を独力で架けた。

蓮月、飢饉救済、幾たびも。

蓮月は、北白川瓜生山のふもとと心性寺に引越し

鉄斎、この頃より待童として蓮月と同居。

鉄斎、京都三条太郎山町に生れる。

円山四条派と交流。

貫名海屋と交流。

1823 1832 岡崎村独居。土ひねりをはじめ。

知恩院で禪髪し蓮月尼となる。

丹波亀山城へ御殿奉公にでる。

養父は知恩院譜代。

生れとすぐ養女にだされる。

のぶ(蓮月幼名)

阿波徳島

編集室だより【二〇一四年 一月】

○お雑煮は栗餅。後、多摩墓地へ。

○玉由と由野の日本留学中に、習字の先生をして下さった植村さんを訪ね、板橋の鎮守、天照皇大御神御祭神、天祖神社の茅の輪のくぐり方を教わったのです。

○みなとみらい線に乗り、馬車道の友人を訪ねた。素晴らしい変貌を遂げた横浜をドライブしてみせて下さった。中華街での数えきれない皿数の美味。なにか懐かしいジャズ・ライブハウスでリズム良く飲み。後、カラオケ。

○玉由と由野と友人達と、朝早く伊勢神宮へ。「到来の赤福もちや伊勢の春・子規」包装紙の赤福を手土産に帰ってきた。

○時習館関東在住者の初詣会。泉岳寺、高輪大木戸跡、元和キリシタン遺跡、御田八幡神社蓮乗寺、勝海舟、西郷隆盛会見の地碑、後、あんこう鍋の新年会。

○ニュージールランド南島の最北端、マウントリッチモンド森林公園内のマヌーカ。太古と変わらない、出来るだけ手を加えない、自然のままの蜂蜜が届いた。私のたった一つの贅沢。ご希望は、お申しつけください。

○新しい年の心を込め、観音様の「頭」を彫りはじめる。檜

の香りにかこまれて無我。

○「ご依頼の筆塚の拓本コピーをお送り致します」。深草の「百火山・石峰寺」様がお送り下さいました。伊藤若冲碑の筆塚を貫名苞撰。どうしても読みたくなつた。

○原宿の「太田記念美術館」。「富士山の浮世絵展」に出掛ける。ものごころつくと、私の寝る部屋の襖に、浮世絵、富士三十六景がびっしり張ってあった。いつもいつもそれを眺めているのが好きだった。美術館で、父母の懐に帰った気持ちになつてた。

○太田美術館の地下に、「竹むら」があり、栗ぜんざいゝをいただくのが常だったけれど、こんど「竹むら」が無くなつてた。

○「楽しい時間」を書いて下さっている山本氏の新築のお宅におじゃました。屋根にある太陽光発電により、大きな二階建のお家が床暖房でばかばか。「楽しい時間」に重大な要素があることを思つたのです。

○長く生きてきたけれど、今まで病名がつくようなことは一度もない幸せだった。首筋が少し腫れているから、ネットで調べて「甲状腺のクリニック」に行った。エコーと血液検査で、無痛性甲状腺炎と病名がついた。「二ヶ月か三ヶ月たてば治ります」とのこと、普通に生きている。

和菓子街道 (89)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(12)

「あいつはあこぎな奴だ」という時に使う「あこぎ」という言葉。「強欲」という意味で、決して誉め言葉ではない。しかし、この言葉の語源となる津の阿漕海岸に伝わる昔話は、親孝行の代名詞のような物語だ。

昔、貧しい漁師の平治は、病に倒れた母の精をつけるため、伊勢神宮御用の禁漁区だった阿漕の浦に夜な夜な漁に出て、ヤガラという魚を捕らえて母に食べさせていた。おかげで母は徐々に回復したが、ある夜、ついに警邏に見つかってしまう。急いで逃げたものの、岸辺に置き忘れた傘が動かぬ証拠となり、捕われの身となった平治は、簀巻きにされて沖に沈められてしまったのだった。

世阿弥作の能「阿漕」としても知られる話だが、漁に出た平治が被っていた笠を模して作られた焼き菓子が、今は津の銘菓「平治煎餅」



として売られている。地元の人々にとって、「あこぎ」は心優しい親孝行者を表す誉め言葉。カステラ煎餅の優しい卵味が、「あこぎな奴」のイメージを変えてくれた。

津に伝わる悲話由来のカステラ煎餅

◆平治煎餅本店

住所：三重県津市大門20-15

電話：059-225-3212

お知らせ

▽四月号の原稿は、三月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返信用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

○稲石せきさんがお亡くなりになりました。長い間、三河アラギの方でした。発行所の近くに住まわれ、三河アラギを支えて下さいました。本当にありがとうございました。

○毎月々会員の方々の原稿が届きます。一首一首、全身で読ませていただきます。

一つの花の名前でも、作者の歴史、生活、宇宙、仲間……沢山の積み重ねが加わった作者にしか出来ない花となり、言葉になり、歌となります。

ご自身の心をお歌い下さい。なによりも個性が大切です。

皆様の言葉を、私好みには添削は致しません。深い思いのなかで、いつまでも二緒いたしましょう。(今泉由利)

三河アラギ規定

◇「三河アラギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アラギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アラギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半々分一万円、一カ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半々分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知されたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信用封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年二月二十五日印刷 第六十一巻 第三号
平成二十六年三月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘
平松 裕子・山口千恵子

発行人

今泉由利

発行所

三河アラギ会
三河アラギ発行所 〒一四一〇〇三二

東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一二〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yur188@cronos.oon.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 桜創美